

アイヌ民族博物館 北海道白老町若草町2丁目3番4号

コタンメール

第2号 2002. 8. 10



白老町民は無料！！

家族でポロトの昔を味わってください



ポロトは広い沼ということです。

昔、この付近には大小の沼がありました。その中で一番大きな沼をポロト（大きい）トー（沼・湖）と呼んだのです。

今から約7千年前、海は高速道路の方まで入り込んでいました。海の面積がもっとも広がった時期だったからです。

その後地球の温度が下がってきて、北極や南極の水が増えて来ると、海水面がだんだん低くなって、渚が前の方に移動します。その時低い所に水が残されて、沼になりました。

苫小牧のウトナイ湖やサロマ湖などは同じ時期にできた湖です。

とり残された海水はやがて淡水に変わり、水辺には植物が繁り、飲み水を求めて動物たちが集まって来ます。

海があり、沼や川があるポロト周辺は、人間が生活するのにもっとも良い場所でした。

現在ポロトを取り囲むように、遊歩道が作られて、色々な場所からポロトを見ることができますが、アイヌ民族博物館から見るポロトの姿はまた特別です。

チセから響いてくるムックリを聞きながら静かな湖面を見ていると、1～2世紀前までの白老に戻ったような気がします。

そこで、私たち大人は子どもたちに何を話して聞かせましょうか。

皆さんは皆さんの思いで、私は私の思いで自分の子どもに歴史を伝えたいと思います。

時々刻々と表情を変えるポロトは、周辺で繰り広げられる人々の葛藤を、今日もしっかりと見続けているようです。

夏休み絵画コンクール

コタンを描こう

ことしもコタンを絵にかいてください。

一番かきたいところを じぶんでえらんで あなたしか 見えないコタンを 見つけてください。

くわしくは 学校のポスターで。

7月16日から いつでも来てください。

絵をかくどうぐは じぶんで用意してください。

小学生から下のひと だれでも

―― 場所 アイヌ民族博物館

工芸のチセ再開

館に入ってすぐ右側の工芸のチセは、ちょっとお休みをしていたのですが、中を整備して、7月初めから活動を始めました。

いろいろの側に座って、婦人が機織りをしている様子を見ることができます。

奈良から来られたというご婦人が、興味深く材料のシナ皮を手にして、じっと、出来上がっていく布を見ておられました。

縦糸に横糸を通していく織り方は同じですが、周囲の自然環境で素材が違い、特色のある布が出来上がっていく様子に、目をとめられた風でした。

その環境の中で、技術や製品を見ることは、人の学習に最高の効果をもたらします。

学校の先生方へ

アイヌ民族博物館は博物館です。博物館は町民全ての学習の場ですが、特に、次代を担う児童生徒の教育に力を尽くしたいと思っています。

数年前から、学社融合、つまり学校教育と社会教育の一体化が叫ばれて、先月東京で開催された全国博物館館長会議でも、文科省や文化局からその具体的な施策が説明されました。

博物館の本質は「ほんもの」を提示して、真実を伝えることにあります。

そのために、初めに何が「ほんもの」かを調べます。

博物館で見るもの聞くもの全てを真実と信じてくださる多くの方々にごたえるためにも、真実にこだわっています。

学校教育のどの場面で活用できるかは、すでにご存じと思いますが、釈迦に説法を覚悟で、説明いたします。

結論は、どの学科にも対応できます。また、学年によってカリキュラムを用意いたします。

私たちは文部省の指導要領や、地域の郷土読本を讀んで学習しています。

あらかじめ先生の授業目的をお聞きしてその内容にふさわしい教材や情報、学習方法などを選択します。

あくまでも授業の意図にあわせることに力を尽くします。なぜならば、博物館の学習は学習者の任意性を基本とするものだからです。

アイヌ民族をテーマにしていますが、扱う内容は、先史時代から現代までですし、北方諸民族の文化や、南太平洋諸民族の文化、生物や自然史までも関わりを持っています。もちろん、白老町の歴史はアイヌにとって深いつながりがあります。

当博物館を授業に活用される先生は、その前にぜひ私たちと打ち合わせをさせていただきたいと願っております。

アイヌ民族博物館 学芸課
電話 0144-82-3914

■編集者の言葉



館内を歩いているとき、「クマと人間の格闘が始まるよ。ならいいなハハハ。」と笑っているお客さんに会い、ちょっと淋しくなりました。

炎天下、着物を着て懸命に踊りを演じている職員に申し訳なくも思いました。踊り手の中には、若い女性もいます。みんなアイヌの文化を見てもらおうと一生懸命なのです。我が子はそうでないだろうな。他人の痛みを感じられる人間に育てたつもりだから。

博物館の活動を通して、異文化に敬意を払う人を育てたいと思います。

THE AINU MUSEUM アイヌ民族博物館

<http://www.ainu-museum.or.jp>

museum@ainu-museum.or.jp